



「中国・四国地方」の単元から 社会問題を議論する

－「地域の在り方」学習の例として－

佐賀県 神埼市立神埼中学校 指導教諭 野田英樹

1 はじめに

社会科教育の目標は、「公民としての資質・能力の基礎」を養うこと、換言すれば、よりよい社会を築いていこうとする市民の育成である。そのためには、授業原理として「本物であること（オーセンティック）」をかかげたい。この原理から、学習内容とかかわる社会問題をパフォーマンス課題とし、議論を軸とした学習活動を行う。さらには、市民らしい（市民的な）パフォーマンスを評価の対象としたい。「市民らしい」という表現からは公民の授業を想起しがちだが、このような評価の仕方は地理の授業においてもぜひ意識したい。教室という空間ではあるが、社会と同じ状況・文脈のなかでの学びこそ、市民の育成を可能にすると考える。

2 授業原理と パフォーマンス課題・議論・評価

(1) 授業原理とパフォーマンス課題

まず、「本物であること」から導かれるパフォーマンス課題は現実の社会問題である。スコープ・シーケンス法^{*1}にもとづく学習指導要領の内容をふまえつつ、現実の社会問題を授業にもちこむのである。パフォーマンス課題とする社会問題は、次の三点を満たすものがよい。

- ①単元の学習内容と関連がある
- ②答えが確定しておらず、議論の余地がある
- ③生徒が自分ごととして考える価値がある

③は、「その社会問題が起きている空間の内側に生徒が身をおき、思考・判断できること」と言いかえることもできる。地理的分野においては、とくに重要な条件であると考えられる。

なお、社会問題をパフォーマンス課題として設定するにあたっては、三分野制にとらわれず、総合社会科の立場で考えてみることも必要だと考える。なぜなら、社会問題は、地理・歴史・政治・経済・社会等、さまざまな側面から見るのが可能だからである。

(2) 授業原理と議論

次に、「本物であること」から導かれるおもな学習活動は議論である。すなわち、社会における市民の行為と同様の活動を行うのである。授業に議論を取り入れることは、新学習指導要領が求める「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の一環であり、また、引き続き大切であるとされている「言語活動の充実」とも合致する。パフォーマンス課題とのマッチングを検討しながら、**図1**のような学習活動を積極的に導入すべきであると考えられる。

なお、生徒が議論をしているとき、教師にはファシリテーターのような、議論を活性化したり、調整したりする役割が期待される。

(3) 授業原理と評価

さらに、「本物であること」から導かれる評価方法は、ルーブリック評価が基本である。パフォーマンス課題の答えに唯一無二の正解はないからである。評価規準は、生徒の考え（考え方が妥当かどうかをはかるようなもの）になろう。

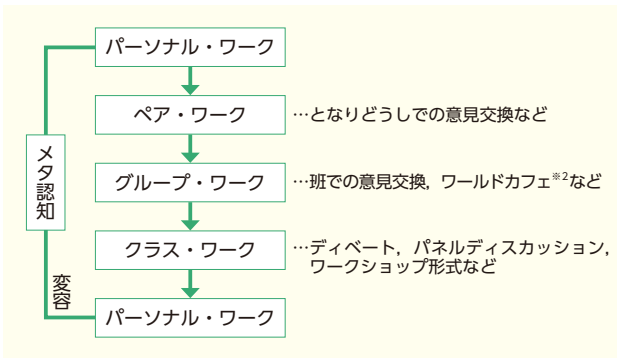


図1 おもな議論の場面と方法

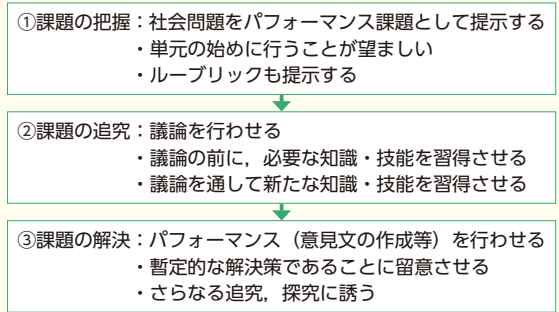


図2 単元構成のモデルと指導上の留意点

評価の場面は大きく二つある。一つ目は議論の場面、二つ目は議論を終えたのちのパフォーマンス（意見文の作成等）の場面である。

なお、多くの生徒の市民的なパフォーマンスを高めるために、ルーブリックは単元の導入時に提示するほうが有効である。

3 単元構成のモデル

新学習指導要領では、「何ができるようになるか（資質・能力）」を前提として、「何を学ぶか（学習事項）」、「どのように学ぶか（学習の過程）」を組み合わせることを重視している。このような「逆向き設計論」にもとづいて、本稿の実践の単元構成を考えた（p.15の表1を参照）。

また、答えが確定していない社会問題について他者と議論を行い解決をめざす、いわゆる課題解決型の学習を行う際には、図2のような三つの段階を意識して授業を設計している。

4 授業の実践 「中国・四国地方」での実践

人口減少社会に突入した日本において、自然減および社会減にともなう過疎化が全国的にみられる現状がある。とくに、中国・四国地方においては早くから過疎化が進んだ地域があり、香川県高松市や高知県土佐

市などで、現状に応じた街づくり、いわゆる「コンパクトシティ」の取り組みが進んでいる。国土交通省も、とくに地方都市においてコンパクトな街づくりが重要として重点的施策に位置づけている。

そこで、『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）第2部3章2節「中国・四国地方」（p.182～194）を学習する際にコンパクトシティの先行事例もあわせて学び、同様の課題に直面している佐賀市の街づくりについて議論することとした。新学習指導要領でいえば、内容「C 日本の様々な地域」の「（4）地域の在り方」において、「学習対象の地域と類似の課題が見られる他の地域と比較したり、関連付けたり」して「考察、構想し、表現する」活動に該当するであろう。

パフォーマンス課題は、「コンパクトシティの機能充実のために、コンベンションホールの建設は必要か」とした。人口減少による税収減少になやむ地方においては、インフラの維持・整備は深刻な課題である。生徒が暮らす佐賀市も、可能な限り中心市街地に集住し効率よくインフラを活用したり、無駄の少ない財政配分を検討したりする取り組みを進めている。とくに、佐賀駅前の再開発は、コンパクトシティの機能充実のかぎであり、そこに、コンベンションホール建設の話がもち上がったのである。

第1時でパフォーマンス課題とループリック(表2)を提示し、第2～5時に中国・四国地方について学習するとともに、過疎化の原因について多面的に考えたり、取られている対策を学んだりして第6時の議論に向けて準備し、意見文を作成した(表1)。

筆者は、学校外の専門家や関連機関と協力した授業づくりを試みている。第6時は、社会を形成する市民として生徒とともに成長しあうラーニング・パートナー(以下、LP)として二名の街づくりの専門家に参加していただき、代表生徒六名との議論を行った。代表以外の生徒は議論を傍聴し、第7時に再度意見文を書くためにメモを取る。第6時を経て、議論で代表をつとめたCさんの意見文は以下のように変化した。

第5時の意見文	2022年は九州新幹線西九州ルートが開通し、佐賀駅も通過駅として利用されます。コンベンションホールを建設すれば、交通の面で便利になり、近くの店やホテルでも行き交います。現在、佐賀市のコンパクトシティ設定地域(佐賀駅周辺)は、県民にとって「あまり魅力的ではない」「回遊ができない」という印象があります。コンベンションホールの建設はコンパクトシティの機能充実に繋がると考えます。
議論を終えての意見文	私は、コンベンションホールの建設に賛成です。理由は、コンベンションホールの建設はコンパクトシティを中心とした佐賀市の活性化に向けて、核となると思うからです。コンベンションホールは複合施設と予定されています。…コンベンションホール建設において、次の提案をします。1つ目は、郊外とのかかわりをもつことです。…2つ目は、建設後の状況を考えることです。もしコンベンションホールを建設した場合、市は将来、コンベンションホールを核とした街づくりをしていかなければなりません。人口減少による税収入りの減少が問題となっている状況下で、コンベンションホールの建設は、市や企業にかなりの負担がかかると予想されます。だからこそ、市は将来のために、コンベンションホールはどのような姿であるべきか、建設後の財政はどうするかなどを、ほかの企業としっかり意見交換しなければなりません。具体的な構想ができあがってから、コンベンションホールの建設に取り組むべきだと思います。

Cさんは議論の前も後も建設賛成派であるが、議論の後には、コンベンションホール建設の意義をとらえ直したり、将来につい

での考えを深めたりしているようすがうかがえる。将来についての考えを深めた部分は、LPより、「現状の分析力は素晴らしいが、あなた方がこれから佐賀で暮らしていくときに、どのような都市であってほしいかを考えて意見文を書いてみてほしい」という示唆があったことによると思われる。学校外の専門家とかかわることで、より深い学びに到達できる可能性を感じている。

5 これから

現在、二つの研究に取り組んでいる。一つ目はLPとともに学ぶ授業づくり、二つ目は外部評価の導入である。

外部評価の導入とは、具体的には、生徒が書いた意見文を生徒の保護者に評価していただいたり、専門家や関連機関に意見文を送り、コメントを返していただいたりすることである。市民としての先輩から、新参者の市民である生徒をきたえ育てていただくのである。本稿の第7時で生徒が作成した意見文も、佐賀市役所の街なか再生係へ送り、いただいたコメントを後日生徒へフィードバックした。

LP、外部評価の導入のいずれも、授業原理である「本物であること」を追究しているなかでの取り組みである。本物のパフォーマンス課題にくり返し取り組み、市民としてふるまい、評価を受ける過程を通して、少しずつ市民としての成長をはかることができると考える。

※1…学習すべき内容を、発達段階をもとに配列すること。

※2…テーブルごとに対話し、一定時間を過ぎたらメンバーを入れかえて対話することをくり返す方法。

表1 単元構成および授業の要点

段階	時数	教師の発問○ 説明◇	生徒の活動、発言・	議論の準備☆
① 課題の把握	第1時	教科書p.152～153「日本の人口の変化と特色」をふりかえり、日本の人口減少や少子高齢化、中国・四国地方の過疎化や高齢化の現状を確認する。 ◇国土交通省はコンパクトシティの取り組みを進めています。例として香川県高松市、高知県土佐市などがあげられます。 ◇佐賀市も同じような取り組みを進めています。 ◇中国・四国地方の単元でコンパクトシティの取り組みもあわせて学び、次のパフォーマンス課題を考えましょう。 パフォーマンス課題：コンパクトシティの機能充実のために、コンベンションホールの建設は必要か ルーブリックを提示する。→その後☆へ	・教科書p.153「⑥日本の人口密度とおもな都市」で、とくに山陰と南四国で過疎化が進んでいることを確認する。 ・『中学校社会科地図』で高松市、土佐市の位置を確認する。 ・佐賀市内の対象範囲を確認する。	☆6時間目に議論を行うことを知る。 ☆コンパクトシティのメリット、デメリットを知る。 ☆高松市、土佐市、富山市、青森市の取り組みについて知る。
	第2時	○なぜ、山陰と南四国で過疎化が進むのか、地形・気候の視点で考えてみよう（教科書p.184～185）。	・山陰は冬に積雪が多く、南四国は台風の通り道になりやすいため、晴天の日が多い山陽に人が集まりやすいからではないか。	
② 課題の追究	第3時	○なぜ、山陰と南四国で過疎化が進むのか、交通網の視点で考えてみよう（教科書p.186～187）。→その後☆へ	・他地域と行き来がしやすい山陽に人が集まりやすいからではないか。	☆九州新幹線九州ルート建設、JR佐賀駅の意義を知る。
	第4時	○なぜ、山陰と南四国で過疎化が進むのか、産業の視点で考えてみよう（教科書p.188～191）。→その後☆へ	・工業がさかんな山陽に、生産年齢人口が集まりやすいからではないか。	☆コンベンションホール建設のメリット、デメリットについて知る。
	第5時	○山陰と南四国で進む過疎化の現状と、その対策について説明できるようになろう（教科書p.192～194）。→その後☆へ	・観光客を呼び寄せたり、定住希望者を受け入れたりしている。徳島県神山町のようにITで町おこしをしているケースもある。	☆役割分担をし、議論に向けて自分の意見をまとめる。
	第6時	○パフォーマンス課題について、LPと議論をしよう。 LP二名に建設賛成派として参加してもらう。 ・荒牧軍治先生…佐賀大学名誉教授（理工学部）。専門は構造工学、地震工学、地盤工学、計算工学。 ・山下宗利先生…佐賀大学文化教育学部教授。専門は人文地理学（都市地理学）。 教師はファシリテーターをつとめる。	・説明を聞き、本時の見通しをもつ。 ・立論（LPのち代表生徒）を行う。 ・相互に反論し、その場で再反論を行う。 ・LPからの評価を聞く。 ・LPの評価をもとに、みずからの意見に補うべき内容や、必要な資料を考える。 ・本時をふりかえる。	
③ 課題の解決	第7時	○前時の議論をふまえ、ルーブリックを意識して、再度意見文を書きましょう。 ◇完成した意見文は、佐賀市役所の担当部署へ送ります。後日、市役所から届いた回答を生徒へ伝える。	・意見文を書く。	

【おもな参考文献】

- ・ジーン=レイヴ、エティエンヌ=ウェンガー著、佐伯胖訳、福島真人解説『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』産業図書、1993年
- ・佐長健司『社会科教育の脱中心化～越境的アプローチによる学校教育研究～』大学図書出版、2019年

帝国書院の指導者専用サイトに、
本授業研究のワークシートを掲載いたします。
(<https://www.teikokushoin.co.jp/members/>)

表2 ルーブリック

		パフォーマンスを評価するための3つの視点		
		①課題に関する重視すべき佐賀市の状況を述べることができる。	②課題に対する自分の意見について理由を述べることができる。	③信憑性のあるデータにもとづいている。
レベル	0	状況について述べていない。	理由を述べていない。	データがない。
	1	状況について述べている。	理由はあるが、佐賀市の状況との整合性が取れていない。	データはあるが、出典やタイトルなどが明らかでない。
	2	状況について、重視すべき理由も述べている。	理由があり、佐賀市の状況との整合性も取れている。	データがあり、しかも出典やタイトルが明らかである。